

## 西南戦争従軍医師の日記について

石 崎 達

私の祖父（石崎鼎吾）は函館医学学校の官費生としてエルドレージ医師（米人）により西洋医学を学び医師となった。明治十年五月十七日付で警視庁の雇医師となり、上田一等大警部を長とする警視兵部隊に配属され西南戦争に従軍した。その日誌により当時の軍医の活動の實際を推察する（当時二十八歳）。

### 一 上田隊編成と川俣到着迄の経過

#### (一) 上田隊の編成（大隊？）

隊長上田良貞一等大警部、（部下参謀？）宮内盛高一等中警部、戸田重行一等中警部、（器械方）脇尾元親、（用度課）斎藤利右衛門、大野九十九、利岡保栄、（医員）石崎鼎吾、宗亀六、兵員五百又ハ六百名。

#### (二) 到着迄の経過

明治十年五月十八日新橋駅十二時卅分汽車で出発、一時

間で横浜着、上船して豊後佐賀関、下関經由同二十二日長崎着。二十三日熊本県（肥後）水俣着。直ちに別働第三旅団大綱帯所に編入された。輸送途中平病患者治療。日誌から糧食関係不完全（佐賀関で兵が漁民から魚を買い短剣で刺身にして食している）を知る。

#### 二 水俣大綱帯所（野戦病院）

医師十二名、調薬生三名、事務二名および医療器械と薬品（前出器械方）よりなり、使用人は主として現地人多数、看護婦の記述なし、衛生兵らしきものはいたらしい。後方病院は四十軒北の八代病院（臨時か官立病院か不明）が患者後送病院である。

第一線は賊軍（西郷軍）が現熊本県と鹿児島県境の矢筈嶽（六八七米）と熊本県の範囲に入る鬼ヶ嶽（七三五米）を結ぶ線を占領し、官軍は両山の山麓に布陣し、別働第三旅団（警視兵）が主力で攻撃している。賊軍も大砲その他の重装備の部隊である。水俣との距離約十軒。

小綱帯所は水俣より八軒（前線より二軒）の地点にあり医師二名（水俣より交替出勤）が長となり、湯出村および野川地区が記録されているが、戦況により随時医師一名宛第

一戦まで出動し、また戻っている。これらは各部落の名主だった家などを使用している。

激戦が矢筈嶽中心（五月下旬）と鬼ヶ嶽中心（六月上旬）と二回あり多数の死傷者を出したが、この時代の特徴として刀を振った賊軍の抜刀隊による被害も無視できない。とくに鬼ヶ嶽では陣地を取ったり、取られたりしている。戦利品からみて賊軍の重装備（大砲、ミニヘル銃など）はかなりのものである。

繙帯所においては取り出せる弾丸は直ちに手術して取っている。石崎医官はここでの最後の戦闘に第一線に進出している。

手術状況は症例別に具体的に記述してある。

実際の日記はここまでであるが、賊軍はその後鹿児島に向かつて退却し、これを追って別働第三旅団は出水（市）↓紫尾山越え↓宮之城（町）に到り、川路少将の指揮下に六月二十五日鹿児島に入り、爾後別働第三旅団病院（兵站病院？）勤務となり、七月五日石崎医師は八木中尉隊付として一時期伊作町繙帯所を開設したが、七月二十一日鹿児島に復帰し、八月十二日重症者二十五名を護送して船で長崎

に到り、ここで集結した別働第三旅団の病院勤務ののち、九月一日負傷者四十四名を護送して船で長崎出発、九月七日東京に帰着した。

右記四十四名の負傷名氏名録は別に記録があり、これを通じて当時の負傷状況がわかり、興味深いものがある。

九月六日警視庁第六病院付となり勤務した。

### 三 日誌より得た諸資料

(一) 佐賀関で飲んだビールを海中に捨てたところ、漁民が舟で集まって来て、天から黄金が降った如くうばい合って拾った。

(二) 湯出村滞在中糧食とくに副食に困り、筍を手に入れてたべて元気が出た。又日誌の別の個所で脚気の問題を取上げて論じているので、戦争中でも脚気の問題があったと思われる。

(三) 或る医師（九州出身）の奥さんから手紙が届き、一同が中の奥様の写真をみて漢詩を作ったりしている。

(四) 雨の日は休戦となったらしい。

等々のことが書かれており、又九州地方の風物、風習、さらに雇った人夫が皆逃げてしまったのは西郷方に同情す

る為かと思われる、などのエピソードが記載してある。

(発表時は細かい分析を加える予定である)

(独協医科大学名誉教授)

## 明治初期における軍医団と 広島医学会との関係

江川 義雄

明治維新を契機として、在来漢方医学体系を一擲して洋学システムを採用してきた。それは医療史における有史以来の革新であった。その萌芽は幕末より胚胎し、既存の幕藩体制の崩壊と先見性をもった先人達の賢明な選択によるものであった。すぐれた指導性をもった先覚者達は明治初期において、医政・医育・医療・医事など全般に亘り、先進国、独・英のシステムを範として、短期間のうちに、わが国に実現させようと尽力した。

ドイツ医学移入と共に、軍陣医学の経験者でもある医学教師は、その時期に、日本の医育に秀れた臨床医家として目覚ましい活動をし、医学校と軍医養成に一体化した円滑なスタートがみられる。

明治四年に全国に鎮台を、明治五年には陸・海軍省が設